

TOKYO美人と、東京100ストーリー

心は翼

連載① (009 新宿)

穂高健一

見舞いの果物カゴをもった井伊佳元が病室をノックした。2度目も、やはり反応がない。26歳の嶋野佐和子は、返事ができないほど、容態が悪いのか。原因はすべてセーフティーにある。本人や身内からの批判や反発は必至だ。

井伊には、歓迎されない面会人だという、つよい緊張があった。3度目のノックも、応答がない。病室のまえで、井伊はしば



らく間を開けてみた。

事故はきょうの昼過ぎ、社員の不注意で起きた。井伊はクレームの処理で外出ちゆうだった。帰店後に、従業員から事故発生の状況を聞いた。その段階から、井伊の心には言いようのない不安が広がってきた。

事故を起したのは40歳にして、独り身の食品チーフだ。ふだんから雑な仕事が目立つ。そのチーフは手押し台車に、果汁パックが6本入ったケースを高く積みあげ、店内の陳列ケースに運んでいたという。

被害者の女性客は20歳半ばだった。松葉杖をつかう彼女は、バラのような清楚な雰囲気だったらしい。彼女はサービスカウンター横に掲げられた、『店長写真』をじっと見あげていた。つまり、佇んでいたのだ。

食品チーフの前方不注意から、台車が彼女に突き当たった。と同時に、彼女の身体は半回転し、松葉杖は吹き飛び、床に転倒した。果汁パック入りのケースが、傾いた台車から崩れ落ちた。オレンジやグレープなどパックが破れ、ジュースが飛び散った。

彼女は右足を押さえ、はげしい痛みなのか、顔をゆがめていた。当然ながら、着衣はジュースで濡れて汚れていた。被害者の名まえ、年齢、住所などはとても聞き出せる状態ではない。店長代



理が119番通報で、救急車を呼んだという。

この間にも、レジチーフが毛布を持ってきて、倒れた女性のからだを丸め込むように、あてがった。タオルで、被害者の顔の汚れをぬぐった。ほかの従業員はモップで床を拭いていた。客が遠まきに口をだす。

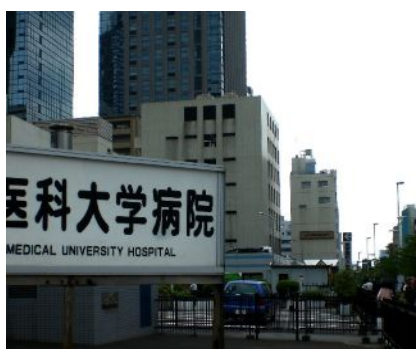
(倒れたとき、かたい床に頭部を打った)

一人の男性客が声高にいつづけた。そのうえ、救急車の隊員にも教えたことから、彼女は脳神経外科がある大学病院に搬送されたのだ。

一連の経緯をきいた井伊は、非はすべてセーフティーにあると判断した。どの角度からとらえても、抗弁などできない。部下の不注意にしろ、店長としての責任をつよく感じた。

井伊はまず池袋消防署に連絡し、被害者の情報を入手した。鳴野佐和子、26歳、搬送先は新宿にある東京総合医科大学だった。住所や電話番号、そのうえ容体などは不明で、本人や病院関係者から直接きくよりしかたなかった。

かれは本社の関係部署に一報を入れてから、病院までやってきたのだ。ふたたび鳴野の個室をノックしてみた。拳の音が虚しく病棟の通路にひびくのみ。女性の病室だ



から、不用意に開けると、変な目で見られてしまう。

しかし、被害者の病状を確認せず、店には帰れない。かれは意を決して病室のドアを開けた。空洞というか、無人だった。入院用の個人具はまったく見当たらなかった。ベッドメーカーキングのまま、点滴スタンドのみが目立つ。

鳴野佐和子はまだ緊急処置室なのだろうか。井伊の脳裏には、得体の知れない最悪の状況が横切った。……頭の打ちどころが悪い場合は、脳内出血などが考えられる。たとえ、きょうの緊急処置が成功しても、脳の後遺症から、彼女は精神障害に陥り、20代の女性の一生に悪影響をおよぼすこともある。そうになると、償いきれない問題となる。

井伊はさつき立ち寄った入院患者の『面会受付』を思い浮かべた。窓口の真横には立て看板があった。脳神経外科は『重病患者治療処置中』と赤字で表示されていた。もしや鳴野佐和子ではないか、と思うと、かれはいたたまれない気持ちになった。

井伊はひとまず見舞いの果物カゴをベッド横の台の上に置いた。かれの視線が15階の病窓に向けられた。3月下旬の赤みを帯びた夕日が高層ビル群のかなたにあつた。陽光が斜



め向かいの超高層ビルのガラスウォールに反射する。かれはコートのポケットから、かわい表紙の『詩集ノート 鳴野佐和子』を取り出した。被害者が池袋店から救急車で運ばれた直後、従業員がレジ台の下から発見したものだ。彼女が倒れた瞬間に、バツクが開き、飛び出したのだろうか。

「これって、被害者のものじゃないから」

レジチーフが井伊に差し向けてきたものだ。かれはノートを捲って見た。詩人の創作ノートだと、理解できた。多くの詩は何度も手が入り、書き直されている。最初の詩は、『レゾン寺院からの手紙』だった。

（被害者の鳴野佐和子は、どんな素顔の詩人なのか）

井伊は池袋駅から新宿にむかう電車の数分間で、最初の一節を読んでみた。

わたしレゾン寺院にいます

標高六千メートル

日の光に

かれた岩山の斜面にへばりつき

風化して白骨のようになった寺院に

考えられることといたら どうして

わたしはここに入るのに あなたはいない

それだけ

そしてそれさえあやしくなり



この詩の一節から、26歳の鳴野佐和子は奥行き深い女性に思えた。他方で、レゾン寺院はどこにあるのだろうか、という思慮に傾いた。標高6000メートルとなると、ヒマラヤ山脈に近いネパール、パキスタン、インドあたりなのか。井伊佳元は46歳になったいまも山に登るが、国内の山々のみ。海外の山岳は知らない。それでも、標高6000メートルの寺院には疑問を持った。そんな高所にはたして寺院とか、巡礼者じゆんれいしやはいるのだろうか、と。この『詩集ノート 鳴野佐和子』は無人の病室においておくべきか。あらためて被害者の鳴野佐和子に手渡すべきか。ここに置けば、病院関係者が、

「これはなんだろう？」

と手にするだろう。創作ノートは発表作品とちがう。まだ他人に読ませたくない詩かもしれない。

病室のドアが開いた。かれは詩集をそれとなくポケットにもどした。

看護師が点滴ボトルを2本持って入ってきた。井伊は軽く会釈えしやくしたうえで、セーフティ

ー池袋の店長だと名乗った。

彼女の視線が見舞いの果

物カゴに流れてから、

「鳴野さんはいま手術室で

す」

「どんな状況ですか」



「右足はどこか他の病院で、骨折の治療ちゆうだったようです。まだ完治ではなかったようですが、かたい床に倒れた衝撃からでしょう、大腿骨にあてがわれた金属が外れかけていました。いまは修復手術をおこなっています」

「先に手術をしたのは、どこの病院だったのですか？」
「ご本人が話さないもので、それが判らないのです」

看護師の顔には困った表情をみせた。

この大学病院は、治療ちゆうの整形外科院がわからないまま、彼女の激痛から緊急処置として手術に入ったようだ。鳴野佐和子はなぜ話さなかったのか。井伊には不可思議な疑問だった。

「頭部の打撲はどうなんでしょう？」
その結果しだいで、途轍もない負担がかかってくる。井伊は胸が締めつけられる思いで、訊いた。

「脳神経外科の検査は終わっています。くわしくは病棟の担当医から、直接、聞いてください」

看護師のことばから、脳神経外科の『重病患者治療処置中』は、鳴野佐和子ではなかったのだ。そこに微かな安堵をおぼえた。しかし、後遺症を考えると、まだ予断は許さない。

「どうしたら、先生に会えますか？」



「ナースステーションに、婦長がいます。そちらを通してください」

看護師は急ぎ足で部屋を出ていった。

井伊も個室を出た。ナースステーションはし字型に曲がった通路の角にあった。婦長は席をはずしており、1時間ほど経ったら、もどってきます、という。

かれは腕時計をみてから、おなじ15階の休憩室に足を運んだ。入院患者たちがソファで、それぞれ病状談義をしている。

井伊は自販機で缶コーヒー買いもとめた。座った椅子の斜めむかいには、自分とほぼ同年代か、やや歳上の、浅黒い顔の男がいた。勇ましく山岳スキーを語っている。

北アルプスの鹿島槍北面を滑走していて、岩盤に激突し、九死に一生を得たという。冒険スキーが専門らしい。長野県の病院の治療が思わしくなく、この大学病院の整形外科で、再手術したのだと話す。

聞き手はとなり合う、顔に肉のない年寄りだった。

「山崎さんは、そういう冒険スキーで、よく生きていますな」
「命拾いは3度目です。冒険スキーの魅力に嵌って、危険だ、そのうち命を落とすぞ、とまわりからいわれつづけていますが、止められない。女房は、亭主はスキーで命を諦めている。いつでも覚悟はできている、といつてます」

山崎はそのうえで、荒々しい山岳を一気に滑降する魅力を語る。

「出身は長野県ですか？」

「いや、四国の高知出身」

山崎は、太平洋の青い海をみて育ったから、雪の山に惹かれて信州の大学に入り、スキー部に所属していた。冬は各地のスキー場ですべる。夏は北アルプスの室堂で合宿し、雪渓で滑っていた。学生時代はいつも山小屋のバイトで、学費を稼いでいたと話す。

「8年間在籍して、結局は単位不足で、結局は卒業できずですよ。八ヶ岳の山小屋の小屋番を5年間やり、学費は納めていたんですけどね。追い出されてしまった」

と白い歯を出して磊落に笑う。

「冒険スキーはいつごろから？ 大学時代から？」

「いや、社会人になってからですよ。志はプロ・スキーヤーでした。回転とか、滑降とか、こうした競技種目のプロ・スキーヤーは、冬季オリンピックに出場してないと、あいてにきれない。そこで考えた。ヒマラヤの高所を滑る冒険スキーヤーなら、スポンサーがつくと。23年間やってきたが、そう甘いものじゃなかった。企業の好不況が、ともに収入に影響する。不況となると、契約破棄。弱い立場ですよ。収入がない年もある」

「奥さんの手前、つらいですか？」

「それがいちばん悩み、女房とは、山小屋で知合い、ラブロマンスで結婚したけど、収入がないと片身が狭い。アルバイトで、知り合いの山小屋の手伝いもしている」

ふたりの話はなおもつづいていた。缶コーヒーを飲み干した井伊は立ち上がった。婦長が帰ってくるまで、あと45分だ。

（この間を利用して、鬼頭統括部長に連絡をとっておくか）

病院の外でないと、ケイタイはつかえない。井伊はエレベーターで一階にむかった。ドアが開くと、生演奏の『ハンガリー舞曲第五番』が耳に飛び込んでいた。院内コンサートが開かれていた。ロビーには車椅子の患者を含め、聴衆でいっぱい。井伊は看護師からプログラムが手渡された。

演奏メンバーは医学部学生や看護生たちで、曲目は軽音楽、映画音楽、演歌まで幅広い。中年以降の患者が好みそうな曲名が多かった。

（鬼頭部長に連絡しても、
鳴野さんに会えていないし、
情報不足のまま、噛みつれるだけだ）

ここは音楽を聴きながら、1日を整理しよう、と井伊は手帳を取りだした。

朝のうちには、最寄りの池袋中央小学校から、与謝野喜一副校長と3年生担任の女教師がやってきた。井伊は店長室で向かい合った。



小学3年生たちの店舗見学会の事前打合せだった。

「子どもは54人で、3班に分かれて、見学させていただけます」
与謝野副校長は獅子鼻の丸顔で、腹が突き出す中年太りだ。み
た目にはずんぐりした滑稽な体躯だった。

「3班に対して、社員が一人ずつ説明役として付き添わせます」
児童たちには例年、青果、精肉、鮮魚など後方の作業場、P O
S室だった。

「お願いがあります。冷凍庫を
体験させていただけませんか。昨
年までいた、杉並の小学校のとき
は、社会科見学でスーパールの冷凍
庫に入らせていただいた。子ども
は大喜びでした」

「そうでしょうね。氷点下25度
の体験はなかなか得がたい」

「北海道出身や、真冬の登山経験者じゃないと、体験できない。
こちらでもお願いできませんか」

与謝野副校長がいった。

「けっこうですよ。ご存知のように、老朽化した店舗ですから、
昨年までは冷凍機がなにかとトラブルを起していました。ですか
ら、冷気は極力、庫外に逃がさないように、コースから外してい
ました。今年はコンプレッサーを取り換えたばかりですから、大
丈夫。見学コースに組み込みます」



「それは楽しみだ」

井伊の視線が与謝野から、手元に流れた。さっき取り交わした、
久能幸子の名刺があった。彼女の薬指の指輪をみると、真新しい。
新婚だろう。

「先生の希望はありますか？」
ほとんど口を開かない久能幸子に向けられた。挨拶のほかは、
副校長に任せだった。

「写真を撮らせていただけますか。発表会に使用しますので」
「特別許可、ということだ」

店長機の電話が鳴った。出てみると、女事務員からで、きのう
買った『厚揚げ』のなかに、パチンコ球が入っているクレーム
だ、という。なぜ、厚揚げにパチンコ球が入ったのか、理解でき
なかった。

来客ちゆうだから、店長代理に任せたいところだ。この男は任
せると、なにかと不必要なめ事に嵌（はま）ってしまふ。逃げること
は上手だが、クレーム処理はかなり下手だ。

「お忙しそうですから」

与謝野副校長が気を利かせる態度で、立ち上がった。社会科見
学の日時を再確認してから、別れた。

井伊は電話の外線を取った。

「こんなものを食べたら、どうするんだ」

50代の男は柳下和男で、練馬区江古田に住むクレマーだ。
井伊には、その声ですぐわかった。

「どんな形状ですか？」

「パチンコ球が四角いのか。わかったことを聞くな」

話を掘り下げると、形状からしてベアリングの玉らしい。メーカーが厚揚げの製造過程で、商材をコンベアーで運ぶ。その機械が破損して混入したのか。あるいは柳下が故意に入れたのか。双方が考えられた。

「あとで、伺います」

「後からだって、誠意がないじゃないか。すぐ来い」

柳下はかなり高飛車な態度だ。メーカーに全面的に非があるクレームでも、消費者側からみれば、販売者責任を問う傾向にある。「わかりました」

井伊はスーツに着替えると、性質の悪いクレーマー柳下の家に向かった。江古田駅は西武池袋線で、池袋駅から三つ目だ。武蔵野音楽大学のキャンパスの裏手をまわりこむ。そのさき路地を入ったところで、木造二階建てアパートの1階だった。

柳下は厚揚げメーカーの謝罪をもとめてきた。突っ張ってもいいが、実際には、ベアリングの混入がゼロとはいえない。ここはやや引きながらも、ウンザリした気持ちから、次回はメーカーに対応させますから、と約束をして切り上げた。

江古田の駅舎に着くと、携帯電話が鳴り、店内事故を知った。池袋店に帰りつくと、松葉杖の女性は救急車で運ばれたあとだった。

事故発生から、すでに3時間半が経つ。

院内コンサートの途中だったが、井伊は病棟のナースステーションにむかった。婦長はさらに30分ほど遅れるらしい。井伊はその足で休憩室に入った。

かれは先刻から気になっている鳴野佐代子の創作ノートを開いてみた。本人の了解なくして、勝手に見てはいけないものだが、鳴野佐和子という人物のいったんでも知りたかったのだ。

電車のなかで読んだ、詩の続きを開いた。

寺院の山のとっぺんに立とうと

砂の斜面を這い登った

眼下に数千メートルの谷底

風に巻き込まれた岩砂利に足を取られ

まいと

必死で岩角にしがみつくと

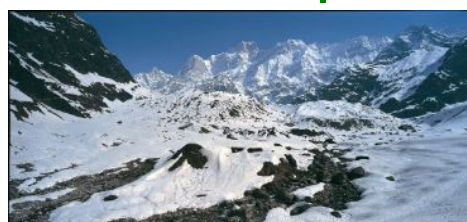
転落したら 谷底で

白骨と化してもみいだされることはないで

しょう

脱出こそ夢でありました

いまその夢の真っ只中にいるというのに



レゾン寺院は厳しい山岳にあるようだ。眼下に数千メートルの谷底がある山岳に登れる、そんな強靱な体力が鳴野佐和子あるの

だろうか。

『転落したら谷底で、白骨になると、岩砂利に足を取られまいと必死で岩角にしがみつく』

それはまさに寺院詣りでなく、登攀だ。

これは山登りが未体験では書けない詩だろう。

レジチーフの話だと、バラのような雰囲気で華奢な体躯だったという。多少の違いがあつたにせよ、強靱な体力があるとは思えない。鳴野佐和子はだれかに話しをきいて創作したのだろうか。腕時計をみた。婦長が帰ってくるまで、多少のところ間があるので、井伊は鬼頭統括部長に連絡を入れることに決めた。

1階のロビーでは管弦楽が奏でられていた。かれは院内コンサートを横目で見、病院の外にでた。視野全体に高層ビル群があつた。それら情景を横目で見ながら

本社の鬼頭に電話を入れた。

「重大な事故が起きて、なぜ店舗の総責任者の上司にすぐ連絡しない。怠慢だ」

鬼頭がいきなり怒りだした。

「最初に、鬼頭部長に電話は入れました。外出ちゆうだったのだから第一報として、総務部長にはあらましを報告しているのだ。」

「大きな事故だ。緊急事態として、なぜ、私のケイタイに電話を入れない。逃げ回っているのか」



鬼頭の声は苛立っていた。

「部長がいかかわしい場所で、密会ちゆうでしたら、ご迷惑かと思ひまして」

「いっしょにするな。キミはふだんから陰に隠れて、女に会っている節がある。他人までも、そう見えるのだ」

「一蓮托生かと思ひまして。いや、呉越同舟かな」

「悪ふざけのことばは慎め。さつきから何度も井伊店長にコールしているんだ。いっこうに繋がらない。どうなっているんだ」

鬼頭の怒りは全身にたぎっているようだ。

「病院では、ケイタイの電源は切る。社会的マナーですから」

「いつもは厚顔無比の男が、妙なところでマナーを守るんだな。ほんとうに、病院だろうな。店にも帰ってこないし」

「まだ東京総合医科大学にいます」

「総務から速報がきて、病院名も、時間も判っている。どういう状況で、事故が起きたのか、聞きたい」

「食品チーフの失態から事故が起きました」

井伊はあらましを説明した。

「あのチーフは雑な性格で、客の応対が悪く、ふだんから本社に苦情が多い。自分勝手にやりたい放題のところがある。平気でルール違反の仕事をする。店長に次いで、クビにしたい社員だ。果汁のケースは何段、積みあげていた？ おおかた3段だろう」

社内ルールでは2段までだ。

「いや、4段です」

「それじゃ前方が見えないだろう。事故が起きて当然だ。お客さんが台車を避けてくれると思いついて入っているのか。私が店舗巡回するたびに、食品チーフの、あの仕事ぶりだと、いつか大きな事故が起きるぞ、と口酸っぱくいつてきたはずだ」

「口酸っぱくいわれて改善できる社員なら、池袋店の業績はもつと挙がっています」

「池袋店は無法地帯か。ふだんの管理はどうなっている？ だめ社員はダメなりに努力するものだ。改善姿勢がいつこうに現れない。どういう教育しているんだ」

「これは教育以前の、資質の問題です。錆びついた鉄はいくら磨いても、光らない。親にもう一度産みなお



してもらうのが、いちばん手っ取り早い」

「きみはなにかと口を開けば、劣等社員の集合体だといっている。それが先入観になり、部下の指導力の欠如につながっているんだ。店長として、教育への情熱がなさ過ぎる。そもそも事故は管理や教育ができていないからだ」

「きょうの部長は機嫌が悪い」

「当然だ。会長で、またしても否決だ」

井伊店長の更迭人事の稟議書が社長決済を得たにもかかわら

ず、松平会長に否決されたというのだ。……鬼頭統括部長は、池袋店の業績低迷を店長の首の据え代えで、解決しようとしている。店長育成と、店舗対策の戦略的な思考に欠けている。それが問題だ、という付帯が今回も付いたようだ。

「店長の資質が悪いと、こつちまでとばっちりを受ける。腹が立つ」

「ご心労を察します」

「他人事のようなことをいうな。被害者の病状は？」

「くわしい容態はつかめていません。整形外科医が、いま手術ちゆうだそうです」

それ以上の説明を避けた。

「住まいとか、家族構成とかは？」

「被害者の住所は不詳です」

「26歳のホームレスの女か」

「被害者がホームレスだから、保険金は払えない、という損保会社はないでしょう」

「能書をいわないで、しっかり聞いてこい」

「いくら厚かましい人間でも、手術室に住所を聞きにいけません」

「なにも、いますぐとは言っていないだろう。一兩日ちゆうの話しだ。そのほかの情報はない」

「被害者は頭を強く打った、というお客さんの目撃情報があります。病院からは、まだ検査結果をきけていません」

「なんの情報もつかめていないのか」

鬼頭はあなどった口調だった

「かりに当座のところ、彼女の脳や頭蓋骨ずがいこつに問題がなくても、心配なのは後遺症あひざいです」

「池袋店は厄介やっかいな問題を抱え込んだものだ」

「後遺症がでた場合、うちの会社がどこまで面倒を看られるか……？」

「井伊店長が個人で看ろ。ふだんの管理力不足がどんな状況を及ぼすか、身体で知ることになる」

鬼頭は怒りを抑おさえきれない口調だった。

「婦長に会う時間ですから、また連絡します」

鬼頭の電話を切った井伊は、院内コンサートの横のエレベーターから、病棟18階に上がった。ナースステーションで婦長に会えたので、名刺をさしむけた。脳神経外科の医師に会いたいと、理由を添そえて申し出てみた。

「きょうはムリです、急患の手術が入っていますから。あしたは学会ですから、あさつてになります。連絡しておきますから、午前ちゅうにでも電話で、外来の窓口で確認してみてください」



「ところで、いま現在、鳴野さんの頭部の治療は？」

「CT検査の結果、治療の処方けいほうは出されていません」

「それはよかったです」

井伊は吐息といきを洩もららした。

「鳴野さんの身内の連絡先とか、これまでにかかっていた病院とはおわかりになりませんか？」

婦長が困った顔で訊いた。

「私のほうは消防署の救急隊の情報だけです」

「鳴野さんは教えない態度なんです。入院には保証人が必要なですけどね……」

「事故の瞬間から、頭のなかが混乱しているのかな」

鳴野佐和子はパニック状態に落ち込み、不安定な精神状態にあるのだろう。それに対して、婦長は口をはさまなかった。

「入院の保証人がいないと、救急処置が終われば、この病院からは追い出されるんですか？」

「入退院の判断は、私たち看護師ではありません」

「費用は私どもの会社で、第三者傷害として支払います。保証人は私個人が署名してもいいです。しっかり治療を受けてもらいたいですから」

「それでしたら、1階の入院手続きの窓口でおねがいします」

そちらに向かいながら、入院の保証人に署名することはリスクがあると井伊は思った。……会社が保証人となる場合は、鬼頭統括部長を通して、総務部とか、法務室とかの承諾しょうたが必要だ。鳴

野佐和子がこのさき脳障害の後遺症を残したり、植物人間になつたり可能性があるとすると、会社はまず法人の保証人に乗らないだろう。ある意味で、会社に交渉するだけムダだ。

「身元保証人は、店長の道義的な責任の取り方だ」

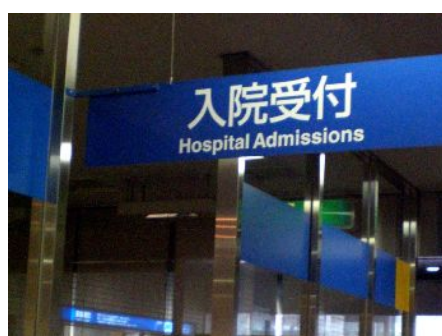
井伊はつぶやいた。入院手続きの窓口では、^お鳴野佐和子の保証人として印鑑を捺した。

そして、病棟の15階にもどってきた。休憩室で待ちつづけた。

夕方6時過ぎだった。病棟エレベーターのドアが開いた。看護師がストレッチャーを押します。井伊は近寄った。術着をきせられた女性は20代半ばで、鳴野佐和子だとわかった。下半身麻酔ますいによる手術だったので、彼女の目の焦点はうつろな感じだった。ストレッチャーが病室に入ると、井伊は病院を引きあげていった。

東京総合医科大学の平日の面会時間は午後3時からだった。事故の翌日、井伊は『面会受付』で丸いバッジを貰い、ルール通り15階のナースステーションに立ち寄った。

「鳴野さんから、これをセーフティーに返してください、と預かっています」



主任らしい看護師から、見舞いの果物が渡された。それだけでも、鳴野佐和子の^{しみじみ}憤りが想像できた。彼女がセーフティーに悪感情をもち続けたならば、このさきの慰謝料や休業補償などの交渉はかなり難航するだろう。井伊は責任者としての苦しい立場を意識した。

「鳴野さんは、だれにも会いたくないそうです」

といわれると、手術の翌日だし、強引には病室に向えなかった。

「きょうのところは、これで失礼します」

井伊はすなおに引きあげた。

次の日はしごとが休みだった。井伊は自宅から大病院の脳神経外科の外来窓口で電話を入れた。婦長からののはなしが通っていた。医師から午後3時に説明を受けることができる、という。

かれは時間通りに出むいた。多少は待たされたが、診察室に通された。50歳前後の医師だった。井伊は鳴野佐和子との関係を説明した上で、身元保証人になっていると補足した。

「鳴野さんはどういう状況で、転倒されたのですか？」

医者から質問を受けた。

「台車にあたったとき、鳴野さんは半回転しながら倒れています。実は、お客の証言だけで、従業員のなかには、頭は打っていないという者もいます。事故現場は防犯カメラから外れた場所だったので、^{かくじょう}確証は取れていません」

「現在のところ、頭蓋骨の骨折とか、脳内出血とか、症状はありません。外傷もなしです。しかし、一度の検査で安全だ、安心だ

とは言い切れません。問題はこの先です」

医師が親族に話すような口調だった。

井伊は緊張をおぼえながら、医師の次のことばを待った。

「数日後、あるいは1カ月、3ヶ月後に、ちよつとした弾みから、頭蓋骨と皮膜の間に出血が起きることがあります。しばらくは観察が必要です。吐き気や、手の痺れの症状が出たら、すぐに検査を受けてください」

「可能性はどうでしょうか？」

井伊は身を乗りだした。

「後日に影響がでるのは、年配者に多いケースです。鳴野さんは20代ですから、可能性は少ないと思います。ただ、CTの定期的な検査は受けたられたほうがいいでしょう。2週間後、2カ月後と、2回も受けられたら、その先は大丈夫でしょう」

「そうさせていただきます」

井伊は謝意を表してから、診察室を出た。

かれは15階のナースステーションに向かった。鳴野佐和子がきょうもすべての面会を拒否していると知った。

かれはこのまま彼女に会わずして、曖昧な立場で日数を重ねてくたなかった。面とむかつて強い批判が飛びだしても、罵声を浴び



られても、ここは会う必要がある、とかれは強行突破をきめた。そして、病棟休憩室にむかった。患者の一人から、看護師が体温計を配る時間を聞きだした。

缶コーヒーを買って腰をすえたとき、聞きなれた声があった。冒険スキーヤーが椅子に腰を下ろし、右足のギブスが痛々しい30代の患者を相手にし、鹿島槍での骨折の病状を語っていた。「最初に死ぬ目に遭ったのは33歳だった。あんたと同じくらいの年だった」

八ヶ岳のスキー場で、行方不明者の救助に協力していたところ、二重遭難に巻き込まれた。雪稜から奇跡的に助かったと語って聞かせていた。それはある種の自慢話だ。

井伊には耳障りだった。

そろそろ体温計が配られる時間だ。その10分前を見計らった井伊は、立ち上がり、鳴野佐和子の名札の前に立った。病室のドアをノックした。こんどは一度で返事があった。足を踏み入れた。

ベッドに座る鳴野佐和子の視線がこちらに向けられた。看護師とは違っていたので、おどろきの目だった。詩を創作していたのか、彼女はノートと鉛筆を持つ。従業員から聞いた、バラのよう



な、清楚せいそな感じ。その通りに思えた。

「セーフティー池袋店の店長です。このたびは当方ふしやうじの不祥事で、大変なことになってしまい、申し訳いげございません」

井伊はふかく頭をさげた。彼女は無言だった。追い返されるのか。そう思いながら、井伊はゆっくり頭を上げた。

彼女は無言で、こちらを直視していた。そこには見舞いの果物カゴをつき返した、強さなどなかった。

「お客さまを大怪我させてしまうとは、謝つても、あやまりきれぬ問題じゃない、とわかっています」

かれはふたたび頭を下げた。

「いい加減さんですね。池袋の裏稼業人の……」

彼女はやさしく静かなしゃべり方だった。

「えっ」

「おねがいたいことがあります」

裏稼業人とはどこから知りえたのだろう。井伊は複雑な気持ちで、彼女の顔をじっと見つめた。【新妻の悩み】の相談に乗った真鍋美紀か、【婚約者は刑事】の布施和香奈なのか。あまり噂が広がらないことをねがった。

「申しわけないが、わたしは裏稼業人じゃない」

「隠かくさないでください。わたしの心から『悪魔』を追い払はらって欲しいのです。心を蹂躪じゅうりゃくする悪魔を」

正気なのか、と井伊は疑った。店内事故による頭部打撲ずいぶうちくから、彼女の脳内神経がおかしくなったのか。そんな推量すいりやうで、井伊は

彼女を凝視ぎやうししていた。

「どうぞ、椅子におかけになってください。悪魔の追討ついでうをいい加減さんにおねがいしに、セーフティーに行きましたら、こんなことになってしまいました……」

彼女はベッドに投げだした骨折手術の右足を指した。

「悪魔の追討といわれても……？ 実体のないものは信じない性格だ」

「わたしの身のまわりで、恐ろしいことが連続して起こるんです。最近では、背後から「悪魔」に押されて階段から転がり落ちて、骨折こっししました。怖くて……」

「その事故が起きた場所はど

こ？」

「駒込こまごにある、旧古河庭園です。

詩の素材をもとめ、園内を散策していましたが、階段の上から、悪魔に突き落とされたのです」

「あなたはセーフティーでも

事故に遭った。それも悪魔のせいかな？」

井伊は彼女の表情を見逃さ

ないように、じっと見つめていた。

「それは違います。私がいい加減さんの写真を見上げていましたから、ジュースを運ぶ台車に気づくのが遅れたのです。骨折後の



リハビリティちゆうで松葉杖でしたから、避け切れなかったのです。悪魔はまったく関わっていません」

彼女は明瞭に言いきった。

「当方の過失です。申し訳ないことをしました」

「その店員さんを、あまり叱らないでくださいね。私も注意不足でしたから。だから、お見舞いの果物は受け取れなかったのです」

鳴野佐和子の思いやりには、井伊はつよい感銘かんめいを受けた。ここは彼女がおびえる、悪魔の話しに耳を傾けてあげようという気持ちになった。

「……想像の世界でしか、悪魔は描けないな。具体的に、悪魔はどんな顔をしている？ たとえば、密林のなかから人間を襲うタイガーのように、目を光らせた野獣とか？ 獣が人間に成り代わっているとか」

「いいえ。野獣でもなければ、神社仏閣の彫刻や絵画にあるような、恐ろしい仁王の顔つきでもありません。ふつうに生活している人が、突如として悪魔に変身する。そんな感じですよ」

看護師が体温計を配りにきた。鳴野佐和子が面会者と話しているという、おどろきの表情があった。看護師はそれを口に出さないう態度で、具合はいかがですか、と訊いた。佐和子の脈を取って



から、病室を出ていった。

「悪魔は心にどんな入り方をするのかな？」

井伊がやや砕けた口調で、訊いた。

「心に入るというよりも、私の身辺につきまとうのです。気配でふり向いても、背後にいないんです。ちよつと掴みどころがない、怖い存在です。それを意識するたびに、わたしの心は悪魔に支配されてしまうのです」

彼女は鋭い勘の持ち主なのか、思考回路がファンタジー的なのか。そうした目で、井伊は彼女をみていた。

「幽霊？」

「それとは違います。悪魔は一度顔を出すと、私を殺そうと、何日もつきまといまます。長いときは1ヶ月も、2ヶ月も。この

病院でも、潜ひそんでいるような気がします。耳の奥には、殺すぞ、という声がひびくのです。幻聴げんちやうでも、錯覚さつかくでもありません。ほんとうに怖いできごとが起こるんです」

人間は生きていく上で、身辺でなにかしらアクシデントが起きる。ときには科学的には説明しにくい奇異きいなできごと、不可思議なアクシデント、奇妙な悪いことの連続すらありえる。

鳴野佐和子はその都度、悪魔のセイだ、殺意がある、と結び付



けているのではないだろうか。

「あなたの命を狙う。それはただことじゃない。刃物を持って、容赦なく襲う、凶暴な悪魔なのかな？」

井伊は別の角度から訊いてみた。

「おぞましい血を流させる殺意とはちがいます。殺人だと判らないように、私を殺そうとしているんです。怖い男です」

彼女の目が見真におびえていた。

「あなたはインドに行ったことがあるのかな？　そこで得体的えたいな知れない悪魔に取り付かれた？」

「いいえ。インドには一度もいったことはありません」

「どんなときに、悪魔は出るの？　たとえば、詩を書いているときとか」

「詩はわたしの人生そのものです。毎日、作品は一つ作るように、自分を義務づけています。だから、いちがいには言えませんが、詩を作っているときもあります」

「どんな詩を作っているとき、悪魔が出てくる？」

「法則性があるようで、これだとわかるものは見当たりません」
彼女の受け答えはしつかりしていた。

「悪魔を呼び込む、詩じゃない。となると、詩の創作を止めたら、悪魔がしぜん消える、一気に解決するというたぐいじゃないの



か……。なにが起因しているのかな？」

かれは腕を組んだ。

「詩の創作とは関係はうすいと思います」

「過去に、トラウマになるような、つよいショックの事件に遭遇した、そんな心当たりは？」

そう訊きながら、井伊は悪魔の正体を知ろうと、深く入り込んでいく自分を意識した。かつて自分は現実社会のなかでしか、物事を考えられなかった。これまでは幻想的げんそうてきとか、ファンタジーな世界に自身をおいたり、想像したり、思慮しりょしたりすることすらなかった。どこまでも現実主義だった。

しかし、いまは鳴野佐和子とともに悪魔の正体を考えようとする自分がいる。そこまで引き込んだ、ふしぎな魅力をもつ女性だった。

「裏稼業のいい加減さんですから、両親から聞かされたことをお話しします。これまで、だれにも話したことはありません。父は大学時代にスキー部員だったそうです。毎年、冬になると、家族三人でスキーに出かけていました。私が6歳のときです。長野県のピラタス蓼科スキー場で、事件が起きたのです」

このスキー場は山麓からロープウェイを使えば、標高2240メートルの高所まで一気に運んでくれる。八ヶ岳の雪の主峰を見渡す、景観の良いところだ。山頂駅のグレンデトップから、樹氷の林を縫ってダイナミックに約4キロも滑降できる。

父親はその豪快な上級コースを楽しんでいたという。

「私は、ゲレンデの片隅で、雪たまるまをつくって遊んでいたそうです。あいてをしていた母が、宿泊ホテルのトイレに行つて帰つてきましたら、わたしの姿がなかったそうです」

6歳児が雪の八ヶ岳山麓で、どこに迷い込んだのか。スキー場はたちまち騒ぎとなった。警察や消防団が捜索に入った。周辺の森林の奥まで探すが、見当たらず、夜になった。

6歳児が雪山に迷い込み、一晚を越すと、絶望的といわれた。母親は発狂寸前だったと、きかされている。

次の日から連日、大勢が少女をさがすが、まったく手がかりはなかった。

「2週間後です。蓼科スキー場とはまったく反対側の、八ヶ岳連峰を越えた、松沢ロッジで、私が発見されたそうです。冬場の山小屋は無人で、避難小屋だそうです」

「それは疑問だな。6歳の少女が独りで、主峰の標高2700メートル級の天狗岳、硫黄岳などを越えて、松沢ロッジなどいない。ファンタジーの世界だ」

松沢ロッジは標高2240メートルで、日本で最も高所の露天風呂がある。積雪期となると、松原湖側からでも、エキスパートの登山者しか入れない世界だ。



「場所をご存知ですか」

「八ヶ岳には、なんども登っているから、地形や状況はわかる。両親の説明通りなら、少女が逆立ちしても、雪峰を独りで歩けないから、誘拐事件に間違いはない」

誘拐犯は2週間も、6歳の少女を雪の山中を連れまわし、山小屋に置き去りにして、逃げたのだろうか。それが事実とすれば、非道だし、大人の身で考えても、ぞっとする恐怖の体験だ

「発見者は登山者？」

「そこまでは、聞いていません。父は語りませんが、母は誘拐事件だったとはつきり教えてくれました」

「犯人像は？」

「母からはなにもきいていません。私は怖がつて、どんな人に攫さらわれたのか、犯人について一言も話さなかったそうです。親ももしつこく聞かなかった、といいます」

6歳児が救出後に、だれにも犯人像を話さなかった。それは解放まえに、強烈な恐怖心を植えつけられたに違いない。それがもとで、トラウマとなり、心の奥底では犯人が悪魔として育ててきたのだろう。



事件からすでに、20年が経っている。誘拐事件はもう法的に時効が成立する。しかし、彼女の心のなかでは、事件が解決されず、いまだに犯人に蹂躪じゅうりつされているのだ。

「気の毒な体験だ。26歳といえば、心に翼をもった、恋をする年ごろだ。それなのに、悪魔があなたの心をいまだに蹂躪し、翼を奪っている。犯人は許せない」

井伊が力をこめていった。

「いままでも、好きな男性がいました。恋をしたくても、心のなかで、悪魔が邪魔します。詩のなかでも、わたしは好い恋ができません」

「つらいことだ」

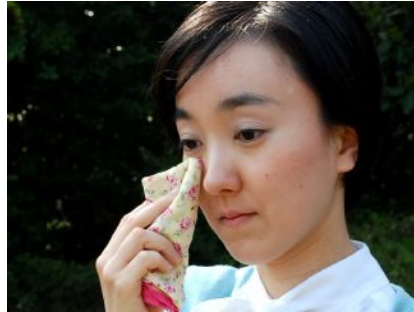
「いい加減さん、わたしの心に翼をください」

佐和子の目から一筋の涙が落ちた。

「よし、このしごきは請け負う。20年前の犯人を追うのは容易じゃない。だが、悪魔の呪縛じゆばくから解きほぐす、唯一の解決方法は犯人を見つけたし、それなりの罪を背負わせてやることだ。それが解決すれば、あなたの心には、きっと自由に羽ばたける翼が生まれる」

井伊は、20年前の悪魔の追撃つしげきに燃える自分を知った。

「よかった。いい加減さんが、わたしの心に翼をくれる。うれし



い」

彼女はハンカチでそっと涙をぬぐった。

写真モデル・森川詩子さん

詩集「受容」(有本多企画・小林陽子さん(詩人)

写真提供(インド)・インド政府観光局

地図(八ヶ岳)の作図・蒲池潤さん

【協力者および提供者は、本文とまったく関係ありません】